

[論文]

わらべうた遊びにおける幼児の音楽的成長について
—異年齢保育でのコミュニケーションの分析をとおして—

幼児教育学科 准教授 長谷川 恭子

Musical development of infants in a Japanese children's singing game
—An analysis of communication in multi-aged childcare—

Kyoko Hasegawa

キーワード：わらべうた、音楽的成長、異年齢保育、コミュニケーション、文化の伝達
Key Words : Japanese children's singing game (“warabeuta”), musical development,
multi-aged childcare, communication, transmission of culture

要約：本研究では、異年齢保育での主活動で行われるわらべうた遊びで、幼児のコミュニケーションによる音楽的成長がどのように現れているか、事例分析した。保育園における音楽の主活動を継続的に観察・分析した結果、異年齢の子どもの間で起こる直接的・間接的な教示が音楽的成長の効果を高めていることが確認された。それは、わらべうた遊びを保育で扱うという文化の伝達により引き起こされていると考えられる。このことから、保育においてわらべうた遊びを主活動として扱うことが有意義であることが明らかとなった。

1. 研究の目的

平成 29 年告示保育所保育指針および幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、三法令）では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として 10 項目が挙げられている。10 番目には、「豊かな感性と表現」として「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」と示されている。領域〈表現〉には、この項目が最も関わりの深い内容となる。つまり、この項目は、領域〈表現〉に関わる活動をすることで、コミュニケーションを通じた表現により豊かな感性を育成することを示していると考えられる。

音楽的な表現活動のひとつに、わらべうたの活動が挙げられる。わらべうたは、歌と遊びが融合した活動である。三法令でのわらべうたの扱いは、領域〈環境〉の「内容の取扱い」において「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」と示されている。三法令では、わらべうたは文化を知り、世の中と繋がるための環境（ツール）であることを指し示している。しかし、わらべうたは歌と遊びが融合した活動にもかかわらず、領域〈表現〉では取り上げられていない。そのためか、三法令においては、わらべうたを活動に用いる際に見込める発達促進の効果などについては示されていない。あくまでも素材としての扱いとなっているのである。

保育での音楽活動としてわらべうたを用いている教育理念では、ハンガリーのコダーイ・コンセプトが有名である。この指導理念は、わらべうた遊びを保育に取り入れることで、幼児のあらゆる発達を促すことを目的としており、特に音楽的な感覚の育成に効果を上げると主張している。このコンセプトを打ち出したコダーイ・ゾルターン（1937）は、わらべうたについて「うたうことは子どもの本能的な言語であり、小さければ小さいほど、うたといっしょに動くことを要求する。音程と肉体運動との有機的関連は、わらべうたによく表れている」¹⁾と述べている。このことを日本に置き換えて考えても、保育の場でわらべうたを扱うことは、我が国の文化を知るだけでなく、領域〈表現〉の音楽の観点からも、わらべうたが音楽的な教材として有用性が高いことが窺われる。

ところで、トレヴァーセン（2002）は、文化的学習について「文化は直感的に伝えられ、直感的に受け取られるものであって、(中略)その過程には情動が大きくかかわっています。文化を身につけることで、他者となつなりたいという欲求が満たされます (中略) 私たちが文化として考える『モノ』は何であれ、すべて共同的で創造的な学びの『プロセス』の結果です。芸術は、行動すること、分かち合うことにおいて存在します。文化の本質はモノではなくプロセスであり、文化を発展させる原動力は人間の動機なのです」²⁾と述べて

いる。このことは、文化の伝達にはコミュニケーションが必要であり、そのプロセスが大事であることを示している。また、木下(2020)は、子どもと文化の関わりについて「実際の文化伝達は、さまざまな大人と子どもの間で、あるいは子ども同士の間(きょうだい、同年齢の子ども、異年齢の子ども)で展開されるものである。なかでも、保育園・幼稚園・こども園に入園した後、子どもたちは、保育者のねらいのもとに、子ども同士が相互に関わり合いながら集団で過ごす時間が増え、大人から子どもへという伝達ルート以外に子ども同士の伝達ルートも加わることで、文化伝達は飛躍的に促進される」³⁾とし、集団における文化伝達に注目することの必要性を示唆している。このことから、幼児の音楽的な成長について検討するにあたり、幼児による社会(集団)での文化伝達の中での発達過程の分析という観点でみていくことが必要なのではないかと考えた。それにあたり、わらべうたは三法令でも示している伝統文化であり、検討対象としては最適である。そして、音楽的成長をみるための保育課程は、異年齢保育の方がより明確になると考察した。なぜなら、保育における異年齢交流は、幼児同士による小さな社会という環境だからである。木下(前出)も、「子ども同士の教えあいや文化伝達にもっと目を向けることは、人間の文化進化を支える基盤を明らかにする意味において重要」⁴⁾と指摘している。

以上のことから、本研究では異年齢保育で行われたわらべうた遊びによる主活動の分析を通して、幼児のコミュニケーションによる音楽的成長について検討することを目的とする。なお、本研究では、音楽的成長に関わるコミュニケーションを、わらべうたの音楽的な完成度が上がるための働きかけと捉えることとする。

2. 研究の対象と分析の方法

異年齢クラスにおいて、担任が行う音楽表現の主活動の事例を分析対象とする。

2-1. 研究の対象(事例)

東京都の U 保育園のクラス A を観察の対象とする。U 保育園は乳児と幼児が在籍する保育園である。幼児は異年齢クラスとなっている。観察したクラスは合計 21 名のクラスであるが、学年の内訳は年少 7 名(男児 3 名、女児 4 名)、年中 8 名(男児 4 名、女児 4 名)、年長 6 名(男児 3 名、女児 3 名)となっている。

U 保育園は、保育にわらべうたを用いた活動を取り入れている。わらべうたの活動は、主活動として月 2 回から 4 回、担任によって行われる。基本的には自由保育で活動を行っているが、子どもたちはわらべうた遊びの活動が好きなので、積極的に主活動へ参加している。また、自由遊びの時間でも日常的にわらべうた遊びを行っている。

2-2. 分析する事例の観察期間と回数

本研究の分析対象とする期間は 2017 年 7 月から 10 月である。この期間に行われた、計 8 回のわらべうたによる主活動を分析の対象とする。

2-3. 事例観察の手順

クラス A の音楽表現の主活動（30 分程度）を月 2 回、観察・分析を行った。主活動の立案・指導は担任が行った。筆者は主活動のビデオ撮影・観察をし、主活動終了直後に担任および園長と口頭による主活動の振り返りをした（個別あるいは合同で行った）。その後、筆者が活動記録と分析をまとめ、担任にフィードバックした。

2-4. 分析の方法

音楽表現の主活動は、わらべうたを教材として行われている。主活動の構成は、音楽の基礎的な要素を感じるための〈教授の活動〉、〈わらべうた遊びを楽しむ活動〉および〈鑑賞〉で構成されている。本研究の分析対象は、〈わらべうた遊びを楽しむ活動〉に限定する。わらべうた遊びの活動をしている中での幼児間のコミュニケーションの内容を分析し、異年齢の幼児の関わりによる音楽的成長について検討する。

3. 結果

3-1. 音楽的成長に関わるコミュニケーションがみられた教材

表 1 は、8 回の主活動において、〈わらべうた遊びを楽しむ活動〉の部分で使用された楽曲一覧である。曲名が細字で記してあるものは、パートナーの組み合わせが変わらない遊びや、円や一列になって行う隊伍を組んでの遊びまたは役交代の遊びである。曲名が太字で記してあるものは、2 人または 3 人で組む遊びで、パートナーなどの組み合わせを変えながら連続して遊びを行った楽曲である（「ほたるたるたる」を除く）。そのうち、点の編みかけがされている楽曲は、音楽的成長につながる異年齢のコミュニケーションがあったものである。

これらのわらべうたについて、音楽的成長につながる異年齢のコミュニケーションが顕著に見られる遊びとなる楽曲は太字で示した 4 曲ではないかと筆者は予想していた（『くまさんくまさん』『ほたるたるたる』『やなぎのしたには』『おらうちのどてかぼちゃ』）。太字の楽曲が 2 人または 3 人で組む遊びなので、パートナーなどの間での関わりが限られる分、密接なコミュニケーションになると思われるし、担任が意図的に異年齢での組み合わせになるように子どもを促していたので、年上の子どもからの教示的な関わりが濃

く現れるのではないかと考えたからである。しかし、事例では、そのようなコミュニケーションが現れやすいことは確かであるが、必ずそのような状況があるということではなかった。同じ楽曲でも、コミュニケーションが見られた回と見られない回があるし、他の遊びの形態にもコミュニケーションがみられた。また、同じ楽曲で回を重ねていく中で、コミュニケーションも重ねられていた。このことから、異年齢の音楽的成長に関わるコミュニケーションは、遊びの形態や子どもの組み合わせだけでなく、遊びが充実していく過程も要因のひとつであると考察する。

表 1 わらべうたの主活動において〈わらべうた遊びを楽しむ活動〉で扱われた楽曲

1	7月11日	こんこんちき	ほたるこい	いっぴきちゆう	くまさんくまさん	
2	7月26日	でんでんむし	こんこんちき	ほたるこい	くまさんくまさん	ほたるたるたる
3	8月7日	こんこんちき	でんでんむし	ほたるこい	ほたるたるたる	
4	8月24日	こんこんちき	でんでんむし	あめこんこん		
5	9月5日	でんでんむし	じゅうごやのおつきさんな	くまさんくまさん	ほたるたるたる	
6	9月20日	チンチロリン	じゅうごやのおつきさんな	やなぎのしたには		
7	10月17日	チンチロリン	やなぎのしたには	おらうちのどてかぼちゃ		
8	10月24日	やなぎのしたには	おらうちのどてかぼちゃ	ねこがごふくやに		

…異年齢の関わりがあったもの
 …幼児が自主的に実施したがったもの
 太字…2人または3人の遊び

3-2. 活動における異年齢の幼児の関わり

表 2 は、表 1 に太字で示したわらべうた遊びの活動について、異年齢の幼児の関わりの様子をまとめたものである。本研究では、全体的な異年齢の関わりと合わせ、特に年上の子どもが支援をしていることが多かった年少児 C 子に関わるエピソードについても概観していきたい。なお、わらべうた遊びのカテゴリーについて、コダーイ芸術教育研究所(1997)は、3歳から5歳のわらべうたを、〈鬼決め遊び〉〈役交代の遊び〉〈へりふえる遊び〉〈隊伍を組んでの遊び〉〈しぐさ遊び〉の5つに分類している⁵⁾。本研究では、事例で扱われていたわらべうたの分類を〈2人または3人の遊び〉〈役交代の遊び〉〈隊伍の遊び〉とする。

3-2-1. 2人または3人の遊び

〈2人または3人の遊び〉では、異年齢間で動きを合わせるための配慮や教示となるコミュニケーションが多くみられた。

『くまさんくまさん』は、2人が向かい合い、「くまさんくまさん」の部分では拍に合わ

表 2 わらべうた活動における異年齢の幼児の関わり

2人または3人の遊び	くまさんくまさん	7月11日	・動きが不確かな小さい子に、年上の子が手合わせのところで姿勢を低くしたり、視線を合わせるように実施するなどの配慮がある。	直
		9月5日	・子どもたちは「片足あげて」で笑うが（片足で飛び跳ねる動きが拍よりも細かい）、全体的に歌がかなり落ち着いてきているように聴こえる。 ・年少は、だいが動きができるようになっていし、歌えている。年少C子は、しぐさも歌もできてきている。	間 間
	やなぎのしたには	9月20日	・年少C子は、年長A子と組んでいる。年少C子は動きがあやふやだが、年長A子を見ながらだとしてきている。年少C子は、終わった時にニコツとしているように見える。	直
		10月17日	・3回目あたりから、先生が歌声を小さくしていくが、子どもだけで元気にきれいに歌える。「うーうー」だけが強い。 ・年長T男は、年少C子とペアになった時は膝立ちになり、手合わせをする高さを年少C子の身長に合わせて調整してあげている。	間 直
		10月24日	・年中K子は、年少C子の身長に合わせて軽く膝を曲げながら行っている。手合わせも、年少C子の動きに合わせて、優しくやわらかな動きで行っている（拍からずれてはいない）。途中で先生が手合わせの動きについてアドバイスをした後は、年少C子の手を持って教えてあげている様子がある。年少C子の動きに合わせているのか、手合わせが拍よりも遅れ気味になるが、しぐさのところで調整しながら、遊びを進めている。手合わせの部分も、年少C子の小さな動きに合わせて、年中K子が年少C子のところまで手を伸ばしてあげている。 ・年中K男も、年少C子とは手合わせの動きが軽めだが、遅れずにやっている。 ・ペアの様子を見ていると、相手によって手合わせの行い方が違う。大きい子が、相手の様子に合わせている。 ・年長Y男は、年少C子との時は膝立ちになって実施している。	直 直 直
おらうちのどてかぼちゃ	10月24日	・年長は拍に合わせて動きを完璧にしたいようだが、年中と年少は、ただ揺れるのが楽しい様子。 ・おかまのペアは、異年齢の組み合わせだと年中・年少も拍に合わせて動いている。	直 直	
役交代の遊び	ほたるこい	7月11日	・大きい子はすぐにでき、だんだん小さい子もできてくる。歌は、大きい子が中心に歌い出す。 ・遊び方が分からない子を、年上の子どもが促す様子が見られる（背中を押し上げるなど）。	間 直
		7月26日	・オニが既にやった子に当たると、子ども同士で役回りが全員に回るように気をつけたり、遊び方を間違えた子を年長T男が直したりするなど、正しい遊び方で「遊び」を完成させようとする姿がみられる。	直
	こんこんちき	8月7日	・大きい子と小さい子の組み合わせでは、小さい子も大きい子と一緒に拍に合わせて歩ける。小さい子同士は、まだ難しそうだ。	直
		8月24日	・年少は、足が拍に揃う子が多い。子どもたちは、列が詰まってきても、足踏みして調整できる。 ・遊びの最後の方では、足の動きが拍に揃ってきて（年中、年長）、拍に合った足音がする。それに合わせて、歌がきれいに歌えている。	間 間
	あめこんこん	8月24日	・年少C子は、拍に合わせて歩いている。手をつないで輪になって歩く時、隣同士が詰まっているところは足の動きが拍に揃いにくかったが、回を重ねてくると詰まっても揃うようになる。 ・遊びが充実してくると、声は荒くならず、曲想に合った歌声になっている。	間 間
	チンチロリン	10月17日	・歌の出だしはaで歌い出した。声当ての「チンチロリン」の部分は、初めは歌の出だしと同じaで歌っているが、年長A子がgで歌うと、それ以降は全員がgになった。	間
隊伍の遊び	でんでんむし	9月5日	・戻り方を完成させようと集中している子どもたちがいる一方で（特に年長、次に年中）、その状況についていけない子どもがいる（特に年少）。	間

直…異年齢で、特定した相手との直節的な接触またはコミュニケーションがあったもの

間…異年齢で、特定した相手に向けてはいないが集団の中で間接的な働きかけとなったもの

せて拍手し、「まわれ右」「両手をついて」「片足上げて」「さようなら」の部分では歌詞をあらわしたしぐさをする遊びである。円の内側は年少児と年中児、外側は年中児と年長児の二重輪になるように担任が指示し、内側と外側の子どもが向き合っペアとなり、1回歌うごとに外側の輪の子どもが右側へずれていくことで、パートナーを変えて遊んだ。もとのパートナーに戻るまで、遊びは続けられた。7月11日の回では、年少C子とパートナーになる年上の子どもたちは、年少C子の身長や目線に合うように姿勢を低くするなどの配慮をしていた。9月5日になると、そのような配慮の積み重ねで年少C子にしぐさなどが定着してきて、遊びができるようになっていた。また、回を重ねることで子どもたち全員に歌が定着してきており、歌声が安定していた。『やなぎのしたには』は、2人が向かい合い、手合わせの間で「う、う」というおぼけのしぐさや、片方の掌をもう片方の手を拳にして打つしぐさの「おけ、おけ」、怒ったしぐさの「えっへんぷ」などが入り、最後にじゃんけんをする遊びである。『くまさんくまさん』と同じような配置の二重輪になり、パートナーを変えながら、もとの組み合わせに戻るまで遊び続けた。年少C子はしぐさに自信がないのか、動きが小さかったが、年上の子どもが姿勢を低くしたり跪いたりするような配慮をしたことで動きを確認することができ、遊びを楽しむことができた。このような配慮があって一緒に遊ぶことを楽しんだ年少C子が、遊びが終わったところで微笑む様子もみられた。また、年中K子が年少C子の手を持って一緒に動くような直接的な教示をする場面や、年少C子の動きに合わせて速さを調整しているような配慮もあった。『おらうちのどてかぼちゃ』は鍋役の2人が向かい合っ手をつないでいる間にかぼちゃ役が1人入り、歌に合わせて左右に揺れる遊びである。担任は、基本的に年中児の一部と年長児の組み合わせで二重輪を作り、かぼちゃ役の年中児の一部と年少児が1曲歌い終わるごとに隣に移動していくことで、もとの組み合わせに戻るまで遊び続けるようにした。鍋役の年中児と年長児は、歌の拍に合わせて横に揺れることを完璧にやりたい様子であったが、かぼちゃ役の年少児と年中児は揺られることがただ楽しい様子で、揺れが拍に合わないことも度々あった。鍋役とかぼちゃ役が遊びの中で目指している意識にズレがあることが、このような状況になった要因だと考える。目指している意識が一致していた鍋役の2人は、年中児は遊びに慣れている年長児とペアになることで、歌の拍に合わせてしっかりと左右に揺れることができていた。

このように、〈2人または3人の遊び〉では、年長・年中が年少の状況に合わせて配慮をしたり教えたりするようなコミュニケーションをする場面があった。このようにパートナーと直接的な接触があることや、向き合っ視覚で至近距離から動きを確認することで、密接な関わりを持つことを通して年少児の遊びの充実や拍感などが得られたといえる。また、歌声については、元気が良くなる場面もあるが、落ち着いた調子で歌う場面もあり、相乗効果がみられた。向かい合うことでお互いの声がよく聞こえるため、歌声も充実するのではないかと考えられる。

3-2-2. 役交代の遊び

〈役交代の遊び〉では、拍感の獲得に関する相乗効果が多く見られる。

『ほたるこい』は、円の中をオニが歩き、歌い終わりでオニの目の前にいる人とオニを交代していく遊びで、拍に合わせてほたるを集めるように腕を回転させるしぐさを一拍につき一回行う。オニが交代していってしまうので、年齢を考慮した配置で円になっているわけではないし、向かい合っていないので少人数で密接な関わりをすることはない。直接的な関わりは、遊び方がまだ分かっていない年下の子どもへの手助けを年上の子どもがすることくらいである。年上の子どもがしっかりと歌っているので、年下の子どもはそれに合わせて少しずつ歌えるようになった。周囲の歌を聞きながら覚えることが、間接的な教示になっている。『こんこんちき』は門くぐりの遊びで、2人組が向かい合って手で作っている橋をペアで手を繋いで順番に潜っていき、歌い終わりで門が閉まった時に通れなかったペアが次の門になる。基本的には年上の子どもと年下の子どもがペアになるように担任が指示しているが、この時、歩く速さなどについて年上の子どもが年下の子どもに教示するような場面はみられなかった。しかし、年上の子どもに手をひかれて歩くので、年下の子どもがそれに合わせて歩いていくことで、だんだんと拍に合わせて歩けるようになってきていた。間接的に、年上の子どもから年下の子どもへ拍の速さが伝わっていると考えられる。『あめこんこん』『チンチロリン』は、手を繋いで輪になっている子どもたちが歌いながら歩き、歌い終わったところで立ち止まると、中心で目をつぶって座っているオニの後ろに位置する子どもが声を出し、オニが誰の声かを当てる遊びである。オニが交代していく遊びなので、年下の子どもの隣が必ず年上の子どもということはないが、輪で歩くときは年上の子どもたちが歌の拍に合わせて歩いていくので、最初は引きずられて歩いているような年下の子どもたちも次第に拍に合わせて歩けるようになる。また、お互いの歌声を聴いているからか、声当ての場面では一人で声を出すところも歌の開始音の高さで歌っていたが、途中で声当ての場面で別の音高で歌う子どもが出てくると、その音を聴いたことに影響されてか、次に輪で歌い出す際の開始音がその音高になってしまうということもあった。お互いの声を聴き合っているだけに、そのような状況が生じたのではないかと推測する。

このように、〈役交代の遊び〉では年上の子どもと年下の子どもの直接的な関わりが明確に見られるわけではないが、集団で動くことで、異年齢の関わりによる影響が間接的に現れていると考えられる。年長児・年中児が拍に合わせて動いていると、年少児も一緒に動いている間に拍に合わせられるようになっていく。また、歌声に関しては、全体で歌っている中で、年長児・年中児の歌声が響いてくると、年少児はそれを感じ、歌えるようになっていくと考える。歌声に関しては、〈2人または3人の遊び〉よりも〈役交代の遊び〉の方が、全体を聴き合う効果は高いのではないだろうか。

3-2-3. 隊伍の遊び

〈隊伍の遊び〉では、遊び方が簡易であるために、年齢により遊びに求める充実度の差が出ていたように感じた。

『でんでんむし』は円になり、一列になって歌に合わせて手を繋いで歩きながらでんでんむし（かたつむり）の殻のように渦を巻いたあと、渦を解きながら、もとの円に戻る遊びである。年少児は歌に合わせて歩くことに慣れるまで時間がかかるが、年長児はすぐに慣れてしまうし、年中児も慣れるまでそれほど時間はかからなかった。そのため、年長児と年中児がもとの円に戻ることに集中し、大きな歩幅で歩いていってしまうため、年少児がついて行けずにうまく歩くことができないような状況が生まれてしまった。年長児・年中児が拍に合わせて歩くことを通り越し、渦を巻き、もとの輪に戻る活動を完成させることに遊びの目的があったのに対し、年少児がそれ以前に拍に合わせて歩くことに到達していなかったことが、このような状況を生んだのだと考える。

このように、異年齢で〈隊伍の遊び〉を行う場合には、それぞれの学年で遊びの目的が合わなくなってしまうと、異年齢のコミュニケーションは希薄になり、相乗効果による成長が見込めなくなってしまうことが分かった。

4. 考察

本研究では、異年齢保育における音楽的成長に関して、わらべうたによる主活動の分析をふまえて考察することを試みた。

8回の主活動の中で、〈2人または3人の遊び〉〈役交代の遊び〉〈隊伍の遊び〉が行われた。遊びの形態の違いが異年齢のコミュニケーションの量の違いに影響しているということとはなかったが、コミュニケーションの質の違いがあった。〈2人または3人の遊び〉は直接的なコミュニケーションによる音楽的な向上が多かったが、〈役交代の遊び〉〈隊伍の遊び〉では間接的なコミュニケーションによる音楽的な向上が多かった。これらのわらべうたを総合してみると、直接的なコミュニケーションと間接的なコミュニケーションの量的な差はさほど大きくないことから、遊びの形態が偏らないようにすることと、コミュニケーションの質のバランスが良いことが、異年齢のコミュニケーションによる音楽的成長を促す要因となっていると考える。

わらべうたの活動をすることは文化伝達であることについて、「1. 研究の目的」でも触れた。木下（前出）は「教示行為（teaching）も、先の世代から後の盛大に確実かつ効率的に文化を伝達する基盤となっている」（p.19）とした上で、教示とみなせる行動として Caro&Hauser（1992）の論⁶⁾をもとに「『(i)ある個体 A が、知識や技能をもたない個体 B

がその場にいる場合だけ行動を修正する。(ii)その A の行動にはコスト(負担)がかかり、すぐに利益が得られない。(iii)その一方で、A の行動の結果、B は効率よく新たに知識や技能を獲得できる』というすべての条件を満たす場合、A の行動は教示とみなせるとされている」⁷⁾と述べている。分析した 8 回の事例では、異年齢のコミュニケーションにより拍感(歌の拍に合わせて動く)や歌声、音高の理解・音の聴取(音高の歌い継ぎや聞き分け)の面で音楽的な成長が促されたことが明らかとなった。それは、異年齢間において年上の子どもから年下の子どもへの教示とみなせる場面の積み重ねで起こっているが、その過程は木下が示した教示行為に当てはまる。教示には、直接的なものと間接的なものがあったが、このような教示行為が子ども同士の中で現れたのは、〈遊び=文化〉の活動を充実させたい・楽しみたいという共通意識が子どもの中で無意識的に存在し、そのためには全員がわらべうた遊びを習得しなければならないからであり、異年齢の関わりであったから、教示行為が顕著に現れたのだと考察される。つまり、わらべうた遊びの活動は共同的で創造的な学びのプロセスであり、わらべうた遊びが充実することが、音楽的成長をも促すことなのである。その要因は、異年齢による幼児の社会で起こるコミュニケーションが、トレヴァーセンのいう「文化的学習のプロセス」として機能しているからだと考察する。これらの点から、わらべうた遊びの活動を保育に取り入れることの有用性は高く、また音楽表現の活動としてわらべうたを扱っていくことは音楽的な成長の視点からも有意義であることが確認できた。

わらべうたで遊ぶことは、一般的には能動的な体験という印象が強いと思われる。しかし、本研究で分析対象とした事例でみられた、拍に合わせた動きが揃ったり歌声が落ち着いたりすることの要因のひとつは、〈聴く〉ということが重要なキーワードになると考える。聴くことは、他者の表現を感受することである。わらべうたで遊ぶ活動のなかで、聴いて覚えるだけではなく、聴き合うことや、聴き味わうこともできていると考察する。このような観点から、わらべうた遊びは感受の要素も大いに含んだ活動であるということが出来る。

以上のことから、異年齢保育におけるわらべうたの活動は、幼児の直接的・間接的コミュニケーションの中で音楽的成長を促す相乗効果を生む活動であることが明らかとなった。

5. 今後の課題

本研究では、わらべうた遊びの主活動において、異年齢の子ども間に起こるコミュニケーションが音楽的成長を促す要因になっていることが明らかとなった。このような要因は、保育者の関わり方にも関係があるのではないかと推測される。今後は、子どもへの保育者の働きかけについても研究を進めたいと考える。

- 1) コダーイ・ゾルターン (1937)「わらべうた」 『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践』 p.158
- 2) コールウィン・トレヴァーセン (2002)「第 2 章 音楽アイデンティティの起源：音楽的な社会性は乳児期から存在する」 レイモンド・マクドナルド、デイヴィッド・ハーグリーヴス、ドロシー・ミエル編著『音楽アイデンティティ—音楽心理学の新しいアプローチ』 p.46
- 3) 木下孝司 (2020)「文化伝達を支える発達基盤に関する研究展望—保育実践における文化伝達を検討するために—」『心理科学』第 41 巻第 1 号 p.17
- 4) 木下 (前出) p.20
- 5) コダーイ芸術教育研究所 (1997)『3・4 歳児クラス いっしょにあそぼうわらべうた』
『5 歳児クラス いっしょにあそぼうわらべうた』に掲載されているわらべうたの分類。
- 6) Caro,T.M, Hauser,M. (1992) Is there teaching in nonhuman animals? *The Quarterly Review of Biology*,67(2). 151-174.
- 7) 木下 (前出) p.19～20

引用・参考文献

平成 29 年告示『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』

Caro,T.M, Hauser,M.(1992) Is there teaching in nonhuman animals? *The Quarterly Review of Biology*,67(2). Chicago: The University of Chicago pp.151-174.

木下孝司 (2020)「文化伝達を支える発達基盤に関する研究展望—保育実践における文化伝達を検討するために—」『心理科学』第 41 巻第 1 号、pp.17-35

コダーイ・ゾルターン「わらべうた」(1937)『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践』
中川浩一郎編訳、啓文堂、1980

コダーイ芸術教育研究所 (1997)『3・4 歳児クラス いっしょにあそぼうわらべうた』明治図書

コダーイ芸術教育研究所 (1997)『5 歳児クラス いっしょにあそぼうわらべうた』明治図書

コールウィン・トレヴァーセン (2002)「第 2 章 音楽アイデンティティの起源：音楽的な社会性は乳児期から存在する」 レイモンド・マクドナルド、デイヴィッド・ハーグリーヴス、ドロシー・ミエル編著 (2011)『音楽アイデンティティ—音楽心理学の新しいアプローチ』岡本美代子、東村知子訳、北大路書房